

教員養成の目標 (こども教育学科 小学校)

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	「日本国憲法」「教職入門(小)」の履修によって教員に課せられた職責を深く理解し、各自の大学4年間で、人格の確立と指導力のある教員になるための学びの動機付けを行うとともに自己を見つめ、自己のキャリア形成についての計画をしっかりと持つことを目標とする。「初年次演習」で特色ある取り組みを進める先進的小学校や特別支援学校などを訪問実習も実施し現場重視の学びを展開し、教育の現場での実際的取り組みの現状と課題を把握し、教員に求められる資質と能力について理解を深める。
	後期	教職につくことへの意欲と使命感を確実なものとするため、「教育原論」を核に、教職の意義と役割、職務内容と望まれる教員の資質について基礎的な学習を進める。さらに、実務経験のある教員の指導の下「こども教育学基礎演習」の中で、小中一貫教育を進める学校訪問や、付属小学校との連携で現場感覚を身につけさせる。この現場からの学びと並行して、基幹講義である「教育制度論(小)」を同時に学び、教育課程の学修への導入として、教育制度の背景となる理念や根拠となる法律、改革動向などの教育制度上の枠組みについての理解を深める。また、前期の「英語(外国語)」の開講に引き続き、指導法としての「初等教科教育法(英語)」も開講する。「総合的な学習の時間の指導法(小)」と合わせて、教えることを意識した内容によって小学校課程の学びへのモチベーションを高め、次回生の学びへとつなげていく。
2年次	前期	2年生前期から、小学校の教科内容の履修を多く配置している。「生活」「家庭」「道徳の理論と指導法」「体育」の4教科と「教育課程論」によって、学習指導要領に基づく各教科の目標と指導内容、そのカリキュラム遂行上の留意点について実際の授業と関連づいた学修を行う。実技や活動を多く伴う教科群である特性から、学びが知識の習得のみならず、学生自らが体験し活動し、子どもの立場に立った主体的な学びからのスキルの向上も一層求めるものであり、また現場住還教育の中核である「学校インターンシップⅡ」での経験を合わせた学びの深化と自己形成が強く求められる。また子どもの内面の発達や課題について「こども教育学演習」の学びと関連させながら深い児童理解の上に成立する教育活動や子ども支援の方法について考察を深める。
	後期	後期では、「国語」「社会」「算数」「理科」「音楽」「図画工作」の6教科の教科内容を履修する。実際の授業のイメージをさらに持たせるとともに、授業力、指導力の育成を目指した教科教育法について、「初等教科教育法(家庭)」と「初等教科教育法(体育)」の2科目を配列する。教科内容の履修との連続性を生かし模擬授業、マイクロティーチングの手法をもとにした実践的指導力を身につけることが目標となる。また「心身の発達と学習過程」を履修することで、学習指導と子どもの心身発達の関連性に思考を展開させ、より最適な学習指導の方法についての考察を始める契機とする。
3年次	前期	この学期まで、「教育実習(小)」に必要な知識とスキルを完全に習得することが必要となる。教科教育法については「国語科」「社会科」「算数科」「理科」「生活科」「図画工作」「音楽」の各教科及び「特別活動と進路の指導法」を実務経験のある教員から実践的に学ぶ。3年次の後期において教壇に立って実際に授業ができる力が要請されることから、各教科教育法においては模擬授業等の比率を高め、実践的な指導力の向上を図るとともに、合わせて「特別活動と進路の指導法」についても履修する。教科指導力のみならず、教育心理学等のこれまでに学びを深めてきた内面理解の方法及び「発達障害への支援」と合わせ、学校生活全般にわたる総合的な教師力と一人一人の個への適切な対応力の素地を培うことを目標とする。
	後期	「教育実習事前事後指導(小)」において、教育実習の意義・目的・内容・心得などについて確認し、これまで学んできたあらゆる知識とスキルを動員し、教壇に立つことへの自覚と責任を持たなくてはならない。「教育実習(小)」での観察や授業を通して、授業方法、授業設計法、子ども理解、教育相談、学級経営法、学校運営、保護者や地域との関係づくり、などを実践的に学ぶことになる。教育現場に存在する諸課題は、学力問題だけでなく、生徒指導上の問題、教員同士のチームワークの問題、保護者対応など多岐にわたる。「教育相談の理論と方法」及び「生徒指導の理論と方法」での学びと合わせ、実際の教育臨床において様々な実体験をもとに指導を受けることによって教師としての資質・能力の涵養を図ることを目標とする。また、「教育実習事前事後指導(小)」において、教育実習における各自のポートフォリオを振り返り、成果と課題について確認し、今後の学習への課題設定と教職への意欲づけをねらいとする。また、「教育方法論」を配列し、実習体験と関連付けながらより良い指導方法の考察と授業力の伸長を企図する。

4年次	前期	4年次では、大学での学びと学校現場で必要とされる力との乖離がないように実経験と履修カルテを振り返り、反省的に自己の学びの強化を行うことが必要である。また「特別支援教育概論」を深く学ぶことで、教育心理学や臨床学的な学びを学校現場により一層適応できる力とするための方法の獲得をめざす。また「教育行政学」の履修によって大きな教育の流れも理解したうえで国の新しい答申等の動向を確実に自分のものとした総括的学修が求められる。
	後期	「教職実践演習(小)」によって、学校現場で即戦力として力を発揮できる教員になるための総合的演習を行う。履修カルテを振り返り、現場にとって最も必要な資質・能力が育ってきているかの総点検が必要である。教科指導力、生徒指導力の全般にわたり、模擬授業やグループワーク、ロールプレイなど様々な手法を駆使した総括的演習を行うとともに、「学校インターンシップⅦ」では卒後を見据えた「研修教師」としての実務実習、事例研究、フィールドワークなどにおいて実践力をさらに高め、「学び続けること」の意義を自覚し、内発的な向上心を育むことが重要課題である。そのような4年間の学問的学びと実践を総括し、卒業論文にまとめることになる。